より あってつむぐ 発達をゆたかに

乳幼児期から終末期まで

第11回　老いと死をよりあって向き合う

張　貞京
京都文教短期大学

春から始まった連載が冬に入り、新しい年を迎えました。かけがえのない発達の1年です。私はライフワークとして障害がある人たちの成人期以降を、そして老いと死を見つめてきました。故・田中昌人先生と杉恵先生に連れられ訪れたもみじ・あざみは、一人ひとりの発達課題を生活と仕事、仲間関係においてとらえ、知的障害の程度に関わらず、大人としての日々を送ることができるようにとりくんできた施設です。ほとんどの人が30代～40代だった時期は、職員のサポートを得ながら、何事にも積極的に活動し、年を重ねることにあこがれをもつ豊かさがありました。障害の有無に関わらず、年齢を重ね、大人として成熟することとは、挑戦したい、学び続けたいとねがい、他者と支え合ってつむぎ出される日々を積み重ねることであると教えられました。

十数年前から、もみじ・あざみには高齢期の人が増え、施設内で看取られる人がいます。今、高齢化は、日本全体の現状と課題になっています。2013年に厚生労働省が主導する国民健康づくり運動「健康日本21」の第二次とりくみが進められていることからもわかります。2050年には日本人3人に1人が高齢者である人口構成になると推計されます。そのため、平均寿命ではなく、「健康上の問題で日常生活が制限されることなく生活できる期間」を意味する健康寿命の観点から、一人ひとりが人生を満足してまっとうできるよう社会の環境整備を目的としています。しかし、これらのとりくみは生涯発達の連続線上で高齢期の課題をとらえておらず、身体的な健康に重きが置かれているように感じます。

誰しも、高齢期に近づけば、さまざまな低下や喪失を体験することになります。残念ながら、高齢期の前後で体験するさまざまな低下や喪失を発達の契機とする知見や具体的なとりくみは蓄積されていません。もみじ・あざみのみなさんも例外なく、50代を過ぎた頃から、身近な人の老いや死、自分自身の加齢による心身の変化、やがては友だちの死、そして自分の死と向き合っています。

発達段階や言語表現の力に個人差はありますが、老いや死に直面して見せるもみじ・あざみのみなさんの姿ととりくみは、高齢期の発達課題とは何か、どのように乗り越えていくか、すべての人に示唆を与えています。4人の例から考えていきます。

喪失を乗り越えるために

セイゴウさんは、お母さんを看取ることも葬儀に参列することもできませんでした。ご家族に理由を伺うことはできませんでしたが、お母さんの死に直面した際、理解して受けとめられるかを心配されたのだと考えられます。その後、セイゴウさんは施設内にお墓の造形物を作るようになりました。木材や石を集めて、墓と墓石に見立てたものを作り、そこに草花を供えて両手を合わせます。セイゴウさんに尋ねると、「お参りするで」と答えます。何度も自分の「お墓」を作っては壊し続けました。

他にも、もみじ・あざみに長く関わった人が亡くなったと知らされた後、「〇〇先生は?」と尋ねてきます。その人はどこにいるのかと聞き返すと、「死なはったで」と答えます。職員がセイゴウさんの「お墓」を造形作品として表現させたいと粘土作業に誘いましたが、それには応じませんでした。セイゴウさんの「お墓」は、お母さんを亡くした悲しみの現実を周りにいる人たちといっしょに感じ、向き合う機会を得られなかったためではないかと考えられます。大切な人を失った体験は、人に支えられて乗り越えていきます。悲しみを他者と共感し合って乗り越えることができてこそ、悲しい体験に新たな意味が与えられていきます。もみじ・あざみでは、身近な人との死別に直接お別れを伝えられるようにしています。お別れの際に見せる姿から、別れの儀式が亡くなった人のためではなく、残された悲しみを抱えた人たちが大切な人に別れを告げ、次に向かうためのものだと改めて気づかされています。

身近な人の老いと向き合う

実家が遠いため、半年に1回程度しか帰省できないヒロミさんが久しぶりに帰省して、戻った時の話です。お母さんから「どちら様ですか」と言われ、兄姉から高齢の症状と説明されたこと、お母さんから遠ざけられたことに驚きと不満を吐露しました。その後もお母さんの症状は進み、その変化をヒロミさんは少しずつ受け入れていきます。ただ、帰省から戻った際に、いつも不満であったのは、お母さんの変化に対して自分には何も手伝いをさせてもらえないことでした。

帰省後に開かれる茶話会では、たくさんの同年代の人たちがヒロミさんの悩みに共感しました。同じ頃、もみじ・あざみでは、老化や疾患により心身の変化が進んだ人たちがい